

# 金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

青空文庫



ある金持ちが、毎日、座敷にすわって、あちらの山を見ていますと、そのうちに、「なにか、あの山から、宝でも出ないものかなあ。」というような空想にふけりました。その山というのは、あまり高くはなかったが、形がいかにもよかったのです。ちようど、そのころ、旅の技師が、この村を通って、

「この山には、銅がありそうだ。」といったといううわさを金持ちはききこみました。

「やはり虫が知らせたのだ。毎日、自分はあるの山を見ていると、なにか宝がありそうな気がしてならなかった。」

ある日、金持ちは、金つちを腰にさして、山へ出かけてゆきました。そして、山の中に、頭を出している石を、コチン！と打っては、欠いてみました。すると、ぴかっとして日の光に、金色にかがやくものがまじっていました。それから、夢中になって、あたり落ちている石を割ってみたり、拾い上げて、日にさらしてみたりしますと、どれにも、なにかぴかぴかと光るものがありました。

「銅ばかりでなく、金が出るかもしれない。」

金持ちは、もう頭の中は、宝を掘りあてたときの喜びでいっぱいになって、考え顔をし

でもどつてまいりました。

それから後のことです。

「地主さんのまくらもとへ金の仏さまがお立ちになつて、山を掘れとおっしゃつた……。」「とか、

「だんなさまが、お座敷にすわつて、あちらを見ていなさると、山の方で、金の仏さまが手招きなさつた……。」「とか、村にはいろいろの話が持ち上がりしました。

三人の熟練した坑夫が、北の遠い島から、呼ばれることになりました。

「さあ、宝を掘りあてて、大金持ちになるか、貧乏をして、裸になるか、運だめしだ。力をつづくかぎりやつてみよう。のるもそるも人間の一生だからな。」

金持ちには、ついひまなものだから、ちよつとした空想が、大きなことになつたので、自分ながらあきれましたが、もう、そのときは、村の人たちもたくさん仕事に雇われて、働いていました。島からきた、三人の坑夫は、めいめいいうことがちがつていました。

「この山には、銅も、銀も、金も、鉄もあるけれど、まだ、年が若い。」と、一人がいいました。

これを聞いた金持ちは、

「年としが若いわかそうだが、もう、何なん年ねんばかりたつと、ちょうどよくなるかな。」とたずねました。しかし、これは、木きや、人にん間げんのようなものではありません。坑こう夫ふは笑わらいながら、「五千年ねんから、一まん万ねん年ねんばかりですか。」といました。金かね持もちは、頭あたまを振ふつて、「それじゃ、孫まごの代だいの役やくにもたたない。」と、ため息いきをついたのです。

「いや、若いわかことはないだろう。百尺しやくばかり掘ほり下げたら、いい鉞こうみやく脈やくにぶつつかるよきうなきがするが。」と、一ひとり人ひとりの坑こう夫ふは、自じ信しんありそうにいいました。

そこで、その事じ業ぎょうにかかることになりました。

いままで、さびしかつた村むらは、急きゆうに活かつ気きづいて明あかるくなり、にぎやかにりました。煙え突とつから、黒くろい煙けむりが上あがり、トロッコは、あちらの坂さかを音おとをたてて走はしりました。

しかし、地ち中ちゆうの秘ひ密みつや、人にん間げんの運うん命めいは、ひつきよう、だれにもわかるものでありません。一ねん年ねんとたたぬうちに、金かね持もちは、財ざい産さんを費つかいはたしてしまいました。その時じ分ぶんから、いろいろな、金きんや、銅どうの気けのある石いしがで出でてきました。

三人にんの坑こう夫ふも、いまここでやめてしまうのは、惜おしいものだといいました。

「じゃ、もうあと一ひと月つき。」

「あと十日とおか。」

こうして、希望を追って無理の仕事をつづけるうちに、金持ちは支払いができなくなつて、どこへか姿を隠してしまいました。昨日まで、走っていた、トロツコは止まる、煙は、煙突から立たなくなりしました。村は、昔のように、さびしくなりました。村の人たちは不平をいいながら、ふたたびくわを取るようになりしましたが、島からきた三人の男は、帰る旅費もなく、いつまでも、山の小舎に寝起きをしていなければなりませんでした。

「兄 弟 こんなめにあうくらいなら、くるんでなかつたな。」

「おれは、いい仕事にありついたらと思つてやつてきたんだに……。」

「はやく、旅費だけでもかせいで帰りたいもんだ。」

三本は、顔を見合わせて、こんな話をしていました。そのうち一人が悪い疫病にかかりました。二人は夜も眠らずに看病しましたが、彼らも、感染して、三人は、まぐらを並べて倒れると、苦しみつづけて、遠い故郷を夢に見ながら、とうとう、前後して、死んでしまいました。

村の人たちは、三人の坑夫の身の上を憐れに思いました。その死骸を山にうずめて、ねんごろに弔い、そこへ、三本のなしの木を植えたのでありました。

山の上を通つて風は、なしの若木を吹きました。山の上を過ぐる雨は、なしの木の葉を

ぬらしました。こうして、月日は、たつていったけれど、なしの木には、花が咲きません  
でした。

「この木は、花が咲かないな。」と、ここをあるくたびに、村の人はいくたび、木をなが  
めていいましたでしょう。

しかし、三人のなしの木は、伸びて、大きくなりました。そして、木はあちらの海が、  
見えるほどの高さになったとき、はじめて、三本とも白い花をつけたのであります。めじ  
ろや、ほおじろが、その枝にとまって、明るい海の方の空を見やりながらさえりました。  
三本のなしの木は、夏の末には、いずれもみごとに実を結びました。村の人は、それを  
とつて食べると、あまり、その味がうまかったので、たちまち、評判になりました。

「この村に、なしの木を植えるべえ。」と、百姓たちは考えつきました。

昔、金持ちの住んでいた屋敷も、荒れはててそのままになっていたが、いつしか、そこ  
にもなしの木は、植えられたのです。春になると、村のあちら、こちらに、雪のよう  
な、白いなしの花が咲きました。そして、いずれも、夏のころにはみごとに実つたのであ  
ります。

「どういうものか、この土地は、なしに性が合うとみえるだ。」

こういつて、村の人は、平地といわず、山地といわず、なしの木を栽培して、これを名産にしようと企てました。やがてこの村は、なしの名産地となりました。すると、方々の村々でも、金もうけのことなら、なんだって見逃しはしないので、かぎりなく、なしの木を植えたのであります。それは、あの雲をつかむような、銅や、金や、銀を掘り出すのと、わけがちがったからです。しかし、このなしも、どこにも、よくできるといふのでなかった。ただ北海の波の音の聞こえるだけの広さにかぎっていました。そして、ほかのより、水気があつて、甘かったけれど、また、なんとなく、その味には、淡い哀しみがありました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「童話文学」

1930（昭和5）年6月

※表題は底本では、「金《きん》が出《で》ずに、なしの産《う》まれた話《はなし》」  
となっております。

※初出時の表題は「金が出ずに梨の産れた話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゆうり

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>